

ここから これから

NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
2022年 2月号 [季刊発行]

Vol.
4

からから 便り



子どもの不登校どうしてる？

～オンライン座談会のご報告～

G・G ファームのおもちつき

～年末行事のご報告～

北海道の災害と文学について

1 ページのたより

ここから これから からから相談

相談先のない相談

北海道における被災避難者の受入状況

編集後記

～オンライン座談会のご報告～

1月22日(土)、オンライン座談会「子どもの不登校、どうしてる?」を行いました。参加いただいた方々とゲストアドバイザー相馬契太さんのお話からいくつかピックアップしてお伝えします。



聞いてみよう 話してみよう

オンライン座談会
「子どもの不登校どうしてる?」

1/22
(土)
10:00~12:00
(途中参加、途中退室OKです)
参加費：無料

「訪問と居場所 漂流教室(札幌)」の相馬契太さんを交えての座談会を、冬休み明けの土曜日に開催します。
全道どこからでも参加できる、オンラインでの座談会。
なんとなく、年が明けると親の方が気持ちが沈みがちになったり、無理に頑張ろうとしてまた凹んでしまうことはありませんか?
そんな時期だからこそ、話をしたり聞いたりして、ちょっと気が案になれる時間があるといいのかも知れません。
はじめての方もこれまで参加した方も、気兼ねなくどうぞ!



え方する人がいるんだな、ということがわかることがある。そして、自分の気持ちを言葉で言い表せるようになってくると、だんだんだんだん変わってきます」

名前をつけない

最後に相馬さんからはこんなお話がありました。「僕は、子どもや親御さんと会って、自分にわからないものにはあまり名前をつけないようにしています、「悩み」だとか「困りごと」だとか。自分のことだったら自分が悩んでいるから「悩み」と言っていると思うんですけども、子どもが言ったからといって悩んでいるかどうか、困っているかどうかって、わからないですよ。こっちからそうみえたとしても本人がどう思っているかはわからない。どうしても、「困ってるんだね」「悩んでいるんだね」とまとめたくなってしまうけれど、他人の気持ちには名前をつけずに、言ったことをそのまま聞くようにしています」

参加された親御さんからは「自分が育てられている気がします」「子どもがいるから経験できること。必要だから生まれてきてくれたんだと思う」というお話も聞かれました。そして、「親は孤独」という言葉も…話をするとは、誰にとっても大事なことです。また、この座談会は開催します。

子どもが学校へ行きたくなくなる背景

先生がこわい、ということから学校に行けなくなってしまったのに、先生には理解してもらえないばかりか、「敏感なお子さん」など、子どもにも問題があるかのようにいわれてしまうことも。

「社会不安の高まりや、政府や行政からの学校や先生方への締め付けがきびしくなると、不登校が増えます。教師を追い立てると生徒も追い立てられる、そうすると不登校が増える、ということです。周りのことが見える子ほど、辛くなってしまいますよね(相馬さん)」

子どもの気持ちと学校の認識

不登校の調査において、学校が回答したものと子どもが回答したものでは内容に開きがあるそうです。2020年12月の文科省の調査では、「学校に行きづらいつと感じたきっかけ」で小学生の回答で最も多かったのは「先生のこと」(29.7%)、中学生は「体の不調」(32.6%)の次に「先生のこと」(27.5%)。学校への調査では「教職員との関係をめぐる問題」を選んだのは小学校で4.4%、中学校で2.3%と、子どもと学校の認識に違いが見えます。

知っておいたほうがいいこと

お子さんが不登校になったとき、親御さんはどうしても「学校」と話をしなくてはなりません。学校とのやりとりをどうしたらよいのか、という話から相馬さんが教えてくれたのが、「不登校児童生徒への支援の在り方について^{*1}」という文科省から教育委員会などに向けた通知です。「文科省の方針としては『学校復帰自体を目的にせず、学校はその子の社会的自立につながるようなサポートをなささい』と定めて、内容は教員研修でも伝えられています。だから、学校はここに書かれていることをしなくちゃいけないわけです」

子どもの成長を待つ

漂流教室では特にカリキュラムもなく、子どもがしたいことにつきあっている、と相馬さん。

「本人にとってすごく嫌なことがあって、その嫌なことに対してくもう一回信じてやってみよう(それはたまたまだったのかも)嫌な先生を無視して他の人と会えればいいや」という割り切り方をするのは、子どもの成長を待つところがどうしても大きいなと思います。ただのおしゃべりかもしれないけれど、接して話をする中で自分の考えを整理できたり、違う考

相馬契太さんが学生時代の友人とともに2002年に立ち上げた「訪問と居場所 漂流教室」での活動は大きく2つ。1つは、「家からなかなか出づらいなあ」という子どものところに週に一度1時間訪問する、もう1つは「学校にいきたくないな」、「(学校に限らず)どこか行く場所欲しいな」という人が自由に来られる居場所の運営です。また、相馬さんは漂流教室を運営する傍ら、NPO法人北海道フリースクール等ネットワークの代表、2012年からは札幌市の中学校で相談支援パートナーを務めています。



「訪問と居場所 漂流教室」

open 火曜日～金曜日 9:00-18:00
札幌市中央区南8条西2丁目5-74
市民活動プラザ星園 401
電話 050-3544-6448
メール hyouryu@utopia.ocn.ne.jp

※1文科省ウェブサイト(トップ)教育>小学校、中学校、高等学校>生徒指導等について>不登校>不登校児童生徒への支援について「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」令和元年10月25日

北海道の災害と文学について

コロナ禍で開催が順延し、短期間の開催となった「天災地変人禍に抗して―北海道の災害と文学」展。さまざまな災害が描かれた文学にふれ、その伝える力を強く感じました。展示会の企画をされた、苦名直子さん（北海道立文学館学芸課長）に寄稿をいただきました。

「天災地変人禍に抗して―

北海道の災害と文学」展（北海道立文学館）をとおして

文学作品を紐解いてみると、災害のことが描かれているものが多いことに気づきます。北海道立文学館では、2021年7月13日～8月22日、「天災地変人禍に抗して―北海道の災害と文学」という展示会を開催しました。担当者の1人としてふれる機会があった作品をご紹介します。災害と文学について考えたことを書くように思います。

噴火・泥流

火山王国である北海道は常に噴火被害の危険にさらされています。大正末の1926年5月24日、十勝岳が大爆発します。熱いなだれが積雪を融かして大規模な泥流となりました。死者・行方不明144人。山林耕地などにも大きな被害が出ました。

この災害を正面から取り上げた作品が三浦綾子『泥流地帯』（1977年）です。

「瞬時に泥流は二三三丈とせり上って山合を埋め尽くす。家が流れる。馬が流れる。鶏が流れる。人が浮き沈む。『ぼっちゃーん！ じっちゃーん！ 良子ーっ！』」



三浦綾子 著『泥流地帯』（新潮文庫刊）

二人の声が凄まじい轟音にかき消される。」

正直で働き者の主人公はこの泥流をはじめ、次々と苦難に見舞われます。「苦難を人はどう受け止めるべきか」「クリスチャンの三浦綾子は、この大きなテーマを旧約聖書のヨブ記を下敷きとしながら、小説の中で追求していきます。」

ほかに有珠山・昭和新山の噴火活動をめぐっても、決死の覚悟で火山の活

動を記録し続けた三松正夫を主人公のモデルとした新田次郎の『昭和新山』（1971年）などが挙げられます。

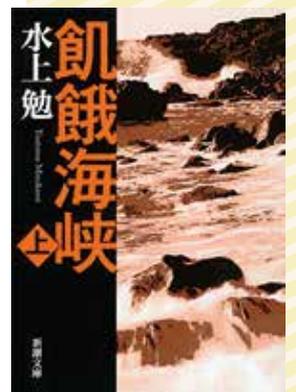


新田次郎 著『昭和新山』（文春文庫刊）

洞爺丸台風と岩内大火

1954年9月26日夜半、台風15号が北海道南端付近に達し、青函連絡船洞爺丸が函館港内で転覆。1155人が死亡。貨物船の4隻も函館港付近で転覆、沈没し、乗組員が亡くなりました。同時にこの台風は、積丹半島基部にある岩内町の八割を焼き尽くす大火を引き起こしています。これらの災害は、文学者たちの関心をひきつけました。

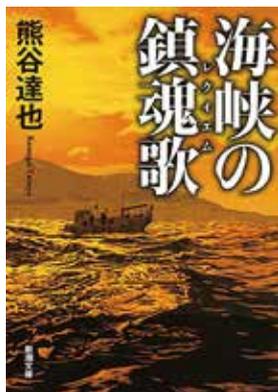
水上勉は両方の災害を結びつけた社会派推理小説『飢餓海峡』（1963



水上勉 著『飢餓海峡』（新潮文庫刊）

年）を書き、三浦綾子は有名な『氷点』（1965年）において、沈む船の中で乗客を和ませ、最後は自らの救命員を他人に譲って命尽きた宣教師のこと（実話）を書き入れました。

熊谷達也『海峡の鎮魂歌』（2013年*当初のタイトルは『烈風のレクイエム』）では、主人公は1934年の函館大火、そして第二次大戦中の函館空襲、そしてこの洞爺丸転覆の3つの災害に見舞われます。



熊谷達也 著『海峡の鎮魂歌』（新潮文庫刊）

三毛別熊事件

恐ろしい熊害もありました。

1915年12月9日、苫前村三毛別（現・苫前町三溪）に巨大なヒグマが出現。開拓民の家を襲い、臨月の女性、

子どもらを喰い殺します。7人死亡、3人が重傷を負うという、ヒグマによる獣害史上最悪の事件です。

この事件を扱った小説の筆頭に挙げられるのが吉村昭『熊嵐』(1977年)でしょう。

「大きな轡ひづりが荒々しく作動しているような音がきこえてくる。それは、巨大な生物の呼吸音にちがいがなかった。かれらの間から叫び声が起こり、かれらは思い思いの方向に走った。或る者は板壁に突き当たって顛倒し、他の者は土間に接した馬舎に走りこんだ。馬が嘶き、農具が倒れた。腰が萎えて土間を這う者もいた」

臨場感あふれる迫真の描写で、ヒグマ襲来の恐ろしさが実感されます。



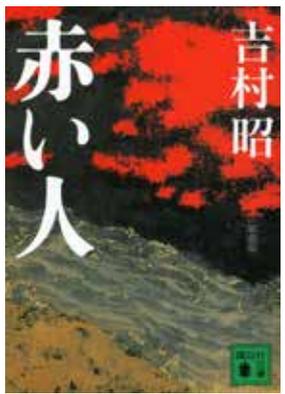
吉村昭著『熊嵐』
(新潮文庫刊)

自然災害を中心に紹介してきましたが、人々の苦難の原因は自然災害ばかりではありません。人間同士の憎しみ、争い、差別などによる悲惨事がいかに多いかを、私たちは知っています。そ

れらは人間によって引き起こされてい

るだけに、より一層強い衝撃をもって迫ってきます。展覧会ではこのいわゆる人禍にも注目し、囚人労働をテーマとした吉村昭『赤い人』(1977年)やタコ部屋労働を描いた小林多喜二『蟹工船』(1929年)、また戦災に関連した作品などを紹介しました。

船山馨『石狩平野』正・続(1967、68年)では、主人公の鶴代は1881年の小樽大火、1880年代の蝗害こうがい、1892年の札幌大火を経験。1898年の石狩川氾濫では愛する人を失い、関東大震災では愛娘を、第二次大戦では東京大空襲で孫まで失ってしまいます。まさに明治、大正、昭和の災害史の中を生きてきたの



吉村昭著『赤い人』
(講談社文庫刊)



船山馨著『石狩平野』(上・下)
(河出書房新社刊)

です。

災害を扱った文学は、私たちに一体何を訴えているのでしょうか。まずは被災のシーンの表現に注目してほしいと思います。作家たちの綿密な取材と筆力による迫真の描写は、単に「〇名が被災しました、被災家屋は〇棟で、被害総額は〇円でした」の報告では決して伝わってこないリアリティをもって

います。さらに執筆のテーマは、災害そのものを伝えることだけではありません。災害に巻き込まれた人々が何を考え、どう行動し、どう生きるかを書くことです。そこに、作家たちが私たちに託したいメッセージがあるのでないでしょうか。『泥流地帯』での粘り強い労働の末に再び稲が実り、『海峽の鎮魂歌』の主人公が大火で生き別れとなった娘と思いがけない再会を果たし、『石狩平野』で鶴代があらゆる苦難の末に曾孫の手をとって再び歩き始める……。もちろん小説なので創作が入りますが、まさにその部分に作家の祈るような思いが込められています。ノウハウや物質的なサポートとは違い、心に働きかけるのが文学だといえるでしょう。

(公益財団法人北海道文学館 吉名直子)

【北海道立文学館】

札幌市中島公園にある文学館。運営は「公益財団法人 北海道文学館」が行い、北海道関係の諸文学資料や関係諸物件を広く収集・保存し、研究と展示・閲覧に積極的な役割を果たすと同時に、各種の文学行事を催しています。「北海道文学館」は、1967(昭和42)年、当初は任意団体として設立され、札幌市の時計台、その後は札幌市資料館に事務局をおき、展示や企画展等を開催していましたが、1995(平成7)年の「北海道立文学館」開館以来、同館の指定管理者として運営にあたり、北海道の文学センターとしての活動を続けています。施設内には、特別展、常設展を行う展示室と、北海道に関連した図書や文芸雑誌、同人誌などを揃えた閲覧室などがあり、収蔵資料はウェブサイトから検索することができます。

〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番4号
電話：011-511-7655 Fax：011-511-3266

【開館時間】9:30～17:00(展示室入場は16:30まで)

【休館日】月曜日(ただし、月曜日が祝日等の場合は開館)／年末年始(12月29日～1月3日)





寄稿 / ページのたより

これから10年

2011年6月に札幌に来て気付けば10年を過ぎました。今回ご縁があり、手記を書かせていただく機会を得、この10年を振り返ってみました。私はあるがたいことに福島とその他の地域から来ている方が多い環境におり、この期間で地元に戻った方、家建てた方、家族構成が変わった方、まだ悩んでいる方、前に進んでいる方、福島に帰られた方、色々な方の話を聞きました。

かくいう私は2度の転職と出産を経て、未だに福島への帰郷を考えている「避難者」の立ち位置から動けずにおります。最近新しい方と出会う度、避難した経緯と出身地を説明すると、「もう道民だねー」という言葉をいただくことが増えました。

確かに、冬の運転にも短い夏にも身体がなじみ、いっせいに咲き誇る春の花の多さにも驚かなくなり、子供たちは「○○したさ〜」と話すことが普通となり、応援する球団はファイターズ一本、回転寿司にはいももちがあつて当たり前、生ビールはクラシック、夏はテントを持って海、正月は口取りを楽しみ、練のお

刺身、カジカやごっこ汁、飯寿司のおいしさにも気付いてしまいました。その反面、緋の衣というりんごと出会い喜び、福島という地を踏んで遠い福島を想い、余市で桃が食べられると聞けば車を飛ばし、渋柿を取り寄せては干し柿を作り、年末にはいかにじんじんを仕込み、かつおはニンニク醤油で食べ、味噌ラーメンには酢を入れて愉しんでいました。そんな日々を送る中、避難した経緯と出身地を伝えることをする度、これからどうしたらいいのだろう、福島にいつ帰ろうと、まだ心は避難者のままだということを確認していました。あの時、小さな息子だけを連れ、親族を置き去りにし、着の身着のまま福島を出てきた私はずっとそのまま気持ちだけ置き去りにし

てきてしまったようです。ごどもを守ることや自分が後悔しないために、これまで必死に考え決断してきたと思っていたことが、ずっと誰かを悲しませ傷つけていたことも知っていました。今年2年ぶりに、初めて陸路を使って帰省してきました。改めて故郷の遠さ、故郷への想いに気がきました。久しぶりに会う父は年をとっていて、過ぎ去った年月の長さを感じました。そんな中30年ぶりに幼稚園の恩師に会うことができ、北海道に行ったことは正解だったねという言葉をいただきました。私自身がこの選択をしたことを少なからず後悔して苦しんでいることを理解してく

れたからこそその言葉だと思えます。後悔はありません。でもこれでよかったからその言葉だと思えます。(ペンネーム BB兄弟)

たという思いもあります。それでいいと思っています。間違いなく言えることは、どの状況においても人に支えてもらい、人がいたから息をしてくることができました。どこの地においても大切に思える人がいます。会えなくても、人を想って喜んで苦しんだりしてられることだけでも十分幸せであるということに、今回改めて気付くことができました。

まだまだコロナの終息が見えない日々ですが、人を想って行動し自分の幸せも見つめ直していければと思います。2022年、皆様にとって幸せな一年になりますようにお祈りいたします。

新たな気持ちで再スタート!



大切な人に会って、やはりほっとします。感謝!

ここから これから からから相談 相談先のない相談

わからないことがありましたら、お気軽に北海道NPOサポートセンターにお問い合わせください！



—“終わったこと”と捉えられることが、怖いさみしい

東日本大震災に限らず、各地でこれまで起きてきた災害、さまざまな事故のあとに聞こえるのは「風化」という言葉です。

発災当時を知る人であれば起こったことを決して忘れてはいない、でも、その後どうなったか、今がどうなのか、という情報は年を追うごとに目に留まりにくくなります。

一人ひとりの中にある思い、それぞれの暮らしや人生における震災の影響、今も津波被災地で続いている復興工事や原発事故の処理…終わることなくつづいているのに「終わったこと」と捉えられていたり、過去のことにされてしまうのは怖く、さみしい。そんな思いに向き合った、橘智子さんから寄稿いただきました。

私の生まれ育ったふるさととは、東北、宮城県の北東部に位置する自然いっぱいの小さな町です。そのふるさとが、11年前に起きた原発事故のために汚染されたことは、今でも信じがたく悲しい現実です。

震災当時、仙台市に住んでいて被災した私は、翌年札幌市への避難移住を決意し、周囲の反対や心配を押し切ってフェリーの予約をしたのでした。

札幌での新生活の始まりと人間関係のゼロからの構築、離婚や数度の転職、引越、再婚などを経験し、慌ただしい生活のなかで、気が付いたら10年が経っていました。

今も目まぐるしい日々ですが、ここ2、3年で大きく変わったことは、自分で作詞作曲を手掛けるようになり、ギターを弾きながら人前で歌い始めたことです。もともと音楽は大好きで、カラオケによく行っていましたが、自分で歌詞やメロディを作った曲にできるとは思いませんでした。

当然ながら自分で作るということは、私の心の中に眠らせていた気持ちや考え、思いつき、願いが歌詞に浮き上がってくるわけです。

初めての曲『福寿草の咲く頃は』ができたときは、「これを歌いながら、あの震災のことを忘れられないように、伝えていきたいな」と思いました。原発事故に対する怒りや悔しさは、もちろんあります。東京

の人たちが使う電気のために、私たち東北人はじめ、北関東や瓦礫の焼却に関わった他県も巻き込んでしまったのだから。

だけでも、札幌での生活を振り返りながら私の胸の内から出てくる歌詞は、誰かへののしったり怒りをあらわにするような言葉はなく、ただただ自分を生み育ててくれたふるさとへの懐かしさ、あの自然あふれる空の下で、小さな両手を力いっぱい広げ、駆け回る、私自身の曲でした。

思いがけず自作の音楽を通じて、過去の自分や震災後も頑張ってきた自分への労いと、抱えた悲しみを少しは浄化できた氣もしました。

小さなことでもいいから、自分の思いや経験を、何かの形（絵や文、ハンドメイド作品での表現など）に残せたら、それが何かのきっかけで後世に伝えていくツールになったり、風化を食い止める機会になるかもしれない。

何よりも、自分の気持ちを整理したり「ああ、自分は頑張ってきたよね」——そう感じてあげることが大切だと思います。



「福寿草の咲く頃は」
YouTubeでご覧いただけます

表紙写真／三陸ジオパーク



【三陸ジオパーク 碓石海岸】(岩手県大船渡市) 写真は碓石海岸の「雷岩」と「乱曝谷」。「残したい日本の音風景百選」にも選定されている「雷岩」の名は、岩の洞穴に打ちつける波が空気を圧縮して「ドドン」と雷鳴のような音を発することに由来します。「乱曝谷」は、陸と雷岩が向かい合わせて切り立つ、数十メートルの断崖絶壁です。



【三陸ジオパーク 平井賀】(岩手県田野畑村) 岩手県宮古市から田野畑村の海岸沿いは「宮古層群」という前期白亜紀後半(約1億1千万年前)の浅海成層が点在しており、その頃に起きた津波の堆積物とされる地層も見つかっています。平井賀に見られる層は「宮古層群」のひとつ。平井賀漁港(写真上)の北側に化石を含む地層があり、サンゴ、二枚貝、腕足類などの化石を間近に見ることができます。(写真下)多種多様な海生生物の繁栄と、太古から繰り返される津波の歴史に触れられる場所です。

